

「アレクシオス1世コムネノスの後継者争い(1118-1119年) ——アンナ・コムネナのアイデンティティに関する一考察——」

片倉 綾那(大阪市立大学)

皇女アンナ・コムネナ(1083-1153/54)は、『アレクシオス1世伝』の著者として知られており、中世キリスト教社会における唯一の女性歴史家と言われている。しかし、アンナの個性を考える際、彼女の父アレクシオス1世コムネノス(在位:1081-1118)の死亡前後に起こった2件の陰謀事件(1118-1119年)を看過することができない。

これらの陰謀事件は、アレクシオス1世の長男で、後継者として指名されていたヨハネスの帝位を狙って起こった事件であり、事件の首謀者は、ヨハネスの姉アンナと彼の母エイレーネー・ドゥーカイナであると言われている。事件の梗概は以下のようなものである。1件目の陰謀は、アレクシオス1世の娘婿ニケフォロス・ブリュエンニオスを担ぎ、ヨハネス即位を妨げようというものであった。しかしヨハネスは陰謀者を出し抜く形で即位し、陰謀は未遂に終わる。事件はこれで終わることなく、2件目の陰謀が起こった。それはヨハネス2世コムネノスが即位して1年以内(1119年冬～春頃)のことであった。しかしこの事件は、ブリュエンニオスが決行に躊躇したため失敗に終わる。陰謀者達は厳罰に処されることなく、財産を没収されたのみであった。

これら2件の陰謀事件は、これまで、コムネノス王朝時代に起こった数ある権力闘争のうちの1つとして、とらえられてきた。しかし近年、当時の女性に視点を置いて、2件の陰謀事件をとらえる試みがなされている。そのような研究を踏まえて、報告者はこれらの事件を、権力闘争のうちの1つとして考えるだけでなく、アンナのアイデンティティを考える上で重要な事件であると考えている。というのも、報告者はこれらの2件の事件を、アンナによる権利回復運動であったと、みなしているからである。

本報告では、次の2点——①2件の陰謀事件、②アンナのアイデンティティ——について、史料を分析しつつ検討する。①では、事件を再検討することで、事件の性格、さらに事件をめぐってのアンナと家族との関係を考察する。そして②では、アンナが『アレクシオス1世伝』で表した、彼女自身のアイデンティティについて分析する。以上、2点を考察することによって、「2件の事件がアンナによる権利回復運動であった」という仮説の論証を試みる。